

I 調査にあたって

当関西学院大学考古学研究会はその周辺に存在する遺跡を調査研究の対象として研究会の主な目的としてきた。その目的たる遺跡は広く知られており、高地性集落として著名な五ヶ山弥生遺跡の他、古墳時代後期の群集墳が存在している。しかしながら数多くの遺跡も、近年になって開墾による遺跡破壊が進み、そのかず數十基といわれた上ヶ原古墳群・五ヶ山古墳群・仁川姐ヶ丘古墳群などの群集墳は、今まで9基を残すのみである。

当研究会は、このような遺跡破壊の現状に対処するため、また研究会の関学周辺の遺跡調査研究の一環として、今回この関西学院構内古墳（以下関学古墳と略記する。）の現状報告及び遺物実測をすることにした。この関学古墳は昭和34年に西宮市史編纂のために武藤教授を中心として調査され、西宮市史に報告されている。以上のような関学古墳をめぐる状況の変化にともない、また前回の調査の出土遺物で未発表のものを紹介するため今回の調査が行はれに。

今後、関西学院大学考古学研究会の調査研究の一環として今回実測調査を行はった関学古墳のほか、他の上ヶ原古墳群や五ヶ山古墳群・仁川姐ヶ丘古墳群も、またこれら後期群集墳ばかりではなく、他の時代の遺跡遺物をも研究会の調査研究

の対象としていく予定である。

今回の調査にあたっての調査団の構成は以下のように行は
い。たゞ1年生の岡野・黒田、1年生の坂井の3名が滋賀
調査で初日以外不在のため、今回の実測は3年生が中心とは
なって行はった。

石室班　　岡野慶隆・黒田昇司・北山勇・高橋丈とる・岩
橋信幸・杉本律子・坂井有弥・田中典子・小野
登茂子

環丘班　　小島周二・畠山恵至・足立正乾・遠藤万里子・
浜口精

また11月23, 24日の両日は大学院生岡本氏の指導協力を
得た。

なお本書の執筆は、院生の岡野の他、北山、小島、畠山、
岩橋、坂井、小野、浜口が分担し、図版の作成については、
各調査員が原図を担当し、岡野、北山、杉本、坂井が製図に
あたった。（北山勇）

II 調査日誌抄

11月 20日 (水) 曇り

午後1時に集合、道具確認の後調査にとりかかる。石室と墳丘測量の2班に分かれ作業開始。石室班は石室内部の割り付けを行なう。なお石室内には、石室に使用された石が若干散在していた。ベンチマークとつける。墳丘班は基準線のレベルを求める。(71.165m) 次に、道や建物の測量を始めめる。

11月 21日 (木) 曇り一時雨

本日より両班とも本格的に実測を開始する。石室班は、奥壁、側壁、平面、玄室断面図の実測を始め、平面図のみ完了する。墳丘班は、25cmコンタで等高線を引き始める。途中雨が降り始め作業を一時中断した。

11月 22日 (金) 晴れ

昨日と同様10時作業開始。石室班は、右側壁、奥壁、玄室断面図の実測を完了する。残るは、左側壁のみ。墳丘班は昨日に続き等高線を引いていく。昨日同様雨のため一時作業を中断する。4時半に終了して道具を片付ける。

11月 23日 (土) 晴れ

昨夜の雨で足下が濡れましたがそれほど作業に障害とはな

うびやかって。石室班は、左側壁の実測を完了し、石室内はす
べて完了する。墳丘班は墳丘の等高線を終え、平板とA点か
らB点に移り、地形実測を始めようが、少く残り明日に回す。

11月24日(日)晴れ

地形実測の残りも午前中にすべて完了。石室の前で記念写
真とり、道具を整理(今回の調査を終了した。(島山恵至)

Ⅲ 位置と環境

関学古墳は西宮市上ヶ原関西学院敷地内の西北隅に所在し、現在西宮市の文化財に指定されている。古墳の立地する地域は六甲山系の東端の独立丘、甲山東麓からだらかに傾斜する上ヶ原台地上で、標高80m未満の地点である。

周辺最古の遺跡には、芦屋市朝日ヶ丘縄文遺跡があり、縄文前期及びそれ以前の石器の出土例があるが、遺構は認められず、当時の状態を明確に把握することはできない。^{註①}

弥生時代にはいると、上ヶ原台地上において、その周端部（標高20～40m）に六軒山遺跡、越水遺跡、岡田山遺跡等が存在するようになる。しかし、どの遺跡も遺物の散布が認められたのみで、調査により遺構が認められたのは、仁川渓谷の北岸、標高130m～145m丘陵上に立地する五ヶ山遺跡のみである。また、六甲山南麓地域では、五ヶ山遺跡と同じ系統にはいる標高100m以上の高地性集落遺跡として、芦屋市会下山遺跡、同城山遺跡、神戸市伯母山遺跡、^{註②} 神戸市金鳥山遺跡などが知られていく。^{註③} ^{註④} ^{註⑤} ^{註⑥}

古墳時代にはいると、海岸線に近い平野部に前、中期の古墳が造営された。前、中期には神戸市の扁保曾塚、東求女塚、延女塚古墳、大正年間に消滅してしまった西宮市大塚古墳、湘荷山古墳、芦屋市では親王塚、金津山古墳等が造られた。

後期になると、横穴式石室古墳が群集墳の形とて山麓台地上に分布するようになる。巨視的に見た場合、六甲山系での後期古墳群は、東より、仁川とよさひ3つの古墳群、八十塚古墳群が顯著な群集状態を示しており、それぞれいくつもの支群に分かれている。

仁川とよさひ3つの古墳群は、仁川南岸の上ヶ原古墳群、北岸の五ヶ山古墳群、仁川旭ヶ丘古墳群である。

註①

上ヶ原古墳群は、関学古墳の他に、上ヶ原淨水場内古墳、県立西宮高校に移築された入組野古墳を含め、3基が現存するのみである。(かく、もとは十数基が存在したといわれている。また、現在の關西學院中学校附近には、車塚といふ前方後円墳が大正年間まで存在していた。この古墳は土室の3つの古墳よりはいくぶん時期が古いのだろう。)

仁川対岸の五ヶ山古墳群には3基の横穴式石室墳が現存(2基)り、73年には新たに2基が発見された。また、旭ヶ丘古墳群は現在2基の横穴式石室墳が存在している。ほかに、広田神社の東方、御手洗川右岸の標高30mの丘陵上には足塚古墳が74年度に再発見された。

芦屋市八十塚古墳群は、西より、朝日ヶ丘、岩ヶ平、老松町、苦楽園五番町、剣谷といふ支群に分けられ、その規模の大きさにおいて広く世に知られてきた古墳群である。

また、武庫川以東においては、宝塚市長尾山系の古墳群が

西摂平野屈指の大群集墳として著名である。
(小島周二、坂井秀弥)

註①藤井祐介「朝日ヶ丘縄文遺跡」
芦屋市教育委員会 1973

②石野博信「小立壁と貯蔵室ともつ立派な住居跡」
関西学院史掌Ⅱ 1967

③村川行弘・石野博信「会下山遺跡」
芦屋市教育委員会 1964

④村川行弘「芦屋城山遺跡調査概報」
調査報告第1集 芦屋市教育委員会 1959

⑤若林泰・育藤英二「伯母野山遺跡」
神戸市教育委員会 1963

⑥石野博信「神戸市金鳥山遺跡」
古代学研究第48号 1967

⑦村川行弘「朝日ヶ丘縄文遺跡、八十塚古墳群」
芦屋市文化財報告第4集 芦屋市教育委員会 1966

III 調査の方法

今回の関学古墳について実施した調査方法は、発掘調査を併行する実測調査である。以下、その方法を順次述べていく。

(1) 水準測量

本調査の水準基準は、西宮市役所の 2500 分の 1 の地図により、墳丘北東部の $0, P = 69.9 \text{ m}$ を利用した。

(2) 平板測量

まず墳頂部に P_A を設定し、墳丘の周辺に任意に $P_0 \sim P_n$ を設定し、これらを基準として墳丘実測を行なった。なお縮尺 1/8, 1/00 分の 1 とした。

(3) 石室実測図の作成

・平面図の作成

石室の主軸にはほぼ平行するように、基準線 $P_0 - P_0'$ を設定する。(主軸方位の測定にはクリスマーターを使用(1:10)) 基準線をもとに、石組最下段の平面図を縮尺 20 分の 1 で作成した。

・側面図の作成

基準線 $P_A - P_A'$ ($0, P = 71.165 \text{ m}$) を設定し、基準線をもとに両側壁の側面図を縮尺 20 分の 1 で作成した。

・断面図の作成

横断面図及び羨道部断面図は、それぞれ P_{01}, P_{02} (P_0)

から、+1.00m, +3.00m)を基準点として作成した。
(岩橋信幸、小野登茂子、浜口精)

Ⅱ 調査結果

(1) 古墳の外形

関学古墳は、墳丘、石室とともにほぼ原状ととどめており、上ヶ原古墳群中唯一の貴重な遺構として知られてきた。以下地形測図とともに古墳の外形を述べてみる。

関学古墳の周辺には、南北に小径とげさんで小屋が建つてあり、古墳のすぐ東側には小川が二川渓谷に向けて流れている。また、古墳の周囲には並んで小径がつながっている。このように古墳周辺の旧地形は明確とはいえない。また、墳丘の基底部附近は小径などによる封土の流失が認められる。墳丘の最高点附近を中心と思われる地点からずれていっため、若干の削平が考えられる。墳丘の東側は、標高23.50mから22.00mにかけて急傾斜が顕著となる。現在ではこの部分に地くずれや凹地がめぐらし、かなりの封土の流失が考えられる。また、奥壁附近には天井石の一部が露出している箇所があり、そこから大量の土砂が玄室内にくずれ落ちている。このように当墳は、墳丘、石室とともに保存状態がよほりであると言いつながらも、日に日に荒廃する可能性のある古墳なのである。

以上、封土の流失などによる旧地形の微妙な傾斜と計ることは困難に「なりつづあるが、現状から判断していくと、当墳

は、西部之標高 71、75m、東部之標高 70、25m の傾斜地に東西の基底部をおき、そこには直径約 12.00m、高さ約 3m の円墳を築造したものとみられる。なお、埴輪列、青石などの外部施設的遺構はこの調査でみつかず確認できず、封土の流失を考慮に入れてても、はじめから存在していないかってと考えられる。(小島周二)

(2) 内部主体

陽浮古墳の内部主体は、主軸を N-12°-W にとり、南に開口する狭長な平面プランをもつ石片袖式横穴式石室である。

石室の規模は、羨道部玄端が若干凹状を損じてゐると思われるが、石室現存長 9.28m、玄室長 4.98m、羨道現存長 3.28m、玄室奥壁幅 1.5m、羨道幅(玄室入口) 1.2m を測る。

石室内には、玄室北東隅上部の崩壊した部分から流入した土砂が、玄室奥壁付近にかけ堆積してゐる。

玄室部には 4 枚の天井石を架構し、その高さは 2.3m を測る。

玄室の両側壁は、角のとれに、やや大形の花崗岩によつて、6~7段に横積みされ、左右からもち送してゐる。石と石とのすき間にには直径 20cm 程度の栗石を数多く用いてゐる。

奥壁には高さ1.8m、幅1.5mの一枚石を用ひています。

羨道は、高さ1.2m、幅1mのやや大形の石を積み
し、羨門としています。天井石は1枚にて現存し、羨道高は
1.7mを測ります。

羨道部は羨門部が狭く、入口附近にひまわりと幅広くひま
わざといいます。

石室の石材は、六甲山系南麓の群東須通有の黒雲母花崗
岩の河原石を用ひています。

羨道に残る天井石には、近世のものと思われるくびきの
痕跡が残っています。これから羨道部が破壊された時期を推
定できません。(岩橋信幸)

Ⅶ 考察とまとめ

関学古墳は、上ヶ原古墳群の内で1基だけ現存する貴重な古墳である。上ヶ原古墳群自体についての論究は後述するところ、ここでは当墳の特徴について若干の考察を加えることにしたい。

関学古墳の内部主体については、いくつかの注目すべき点がみつけられる。

1. 縦長の平面プランをもつ。

2. 石室には、玄石からのもり送りがみられる。

3. 石室を構築していく石材は、角々とれて河原石である。

1. については、ちなみに玄室幅指致3.0を測り白石太一部による石室型式区分の第V型式にあたる。しかし、玄室と羨道の区別は厳然としており、しかも玄室長は、羨道が若干旧式を損じていると思われるが、羨道長をうわまわっており、一概にこの型式区分にあてはまるものではない。

2. の石室のもり送りについては、3. の石材との関連からうえうことがどうより。石材のほとんどが河原石でしめられていて、その河原石で石室を構築する場合、壁と室直にすより、若干もり送った方が天井石も小形ですね。

以上、石室だけについてみに場合、上記のように様々な要素がみられ、石室が構築工間に時期を定めることは困難

である。(か)、当墳も六甲山系南麓に群集墳が造営された
時期(6c後半)に構築されたものと思われる。

関学古墳のみに場合、石室の形態からすると6c後半の様
相を呈している。(か)遺物についてみた場合、関学古墳は
古くから開口しており盗掘とかけられ思われ、遺物が持ち去
られた可能性が大きく、遺物があつてと推定される。その残
された出土遺物において、大きさの異はる金環が5個あるこ
と(か)から少くとも5人が埋葬されたものと思われ、また当古
墳から出土した环が「く」とはじめ墳のものであることがわ
ると追葬が行なわれたものと思われる。

古墳時代後期後半の古墳において、玉類の昌靡が減少して
いく中で、当古墳でそれらが豊富にみられることから、後期
古墳でも古い時期の様相を兼ね備えていると言えるのでは
なかろうか。また、滑石製の勾玉についてあらが、滑石製
の昌靡品は古墳時代前半期、特にⅢ、Ⅳ期の古墳に多くみら
れ、後期にはそれらが衰退していくのであるが、後期後半の
古墳で勾玉、特に滑石製のものが出土しているのは珍しい。

以上、遺跡遺物から当古墳をみた場合、6c後半に当古墳
が造営され、第一次の埋葬がなされ、少くとも7cはじめ
墳まで追葬が行なわれたものと思われる。(北山勇、岩松信幸)

註　白石太一郎　「畿内の後期大型群集墳に関する一
試験」『古代学研究』第42・43合併号

VII 特論

(1) 上ヶ原古墳群の復元

はじめに

仁川をはさむ3古墳群のうち、上ヶ原古墳群はこれまでの記録からみて、現在までにその破壊数が最も顕著な古墳群である。現存する古墳は、関学古墳と上ヶ原淨水場内古墳の2基にまで、過去の記録にあらわれる数10基ばかりの古墳は消滅してしまっている。これらの古墳は、神戸市上水道上ヶ原淨水場の建設工事（大正年間）と関西学院の移転（昭和4年）、およびそれに伴う住宅街の建築工事などにより破壊されたといわれている。^{註①} そして現在ではこれらの古墳の元の位置さえわからぬ状態である。そこで私は過去の記録などから、上ヶ原古墳群の範囲と規模をここに復元してみようと思う。

I

上ヶ原台地周辺の遺跡が知られるようになったのは、紅野芳雄氏が『考古小録』^{註②}著してからである。『考古小録』は紅野芳雄氏が明治41年から、氏が昭和13年に死去するまでの約30数年間に行なった遺跡踏査を日記風につづったもので、これを昭和15年に田岡杳逸氏が編集している。上ヶ原台地周辺の遺跡のほとんどが消滅しまっていいる現在、

かつての姿を復元する上で絶好の資料であるといえよう。その中から上ヶ原古墳群に関する記述を拾い出します。

武庫郡甲東村上ヶ原甲山登山口下の貯水池拡張の際、二三の古墳を掘り当て土器類及び刀剣具類出土す。度々現場に行き墳掘品を採集す。磚、坏、瓶、台付盆、鍍金鐘及び鍍金刀金具、素焼盤等。 (大正3年5月)

甲東村上ヶ原新田山手に神戸上水道貯水池工事中に日々多数の古墳が破壊する。本日現場へ行き一古墳の破壊を見る。素焼高坏一箇出土するのみ。 (大正4年5月9日)

以上の記述は現在の神戸市上水道上ヶ原淨水場付近の事をいっているものと思われる、現存する淨水場内古墳周辺の古墳が推測される。また、

遺跡上(上ヶ原新田墓地西方)に三箇の破壊せられたる古墳あり(以前は沢山有り(が如)。又墓地東方に於いても約十四の古墳を認む。内三基は開口1層れど封土完存、他は封土破壊1石柱露去す。大部は葺石を有せり。 (昭和7年1月24日)

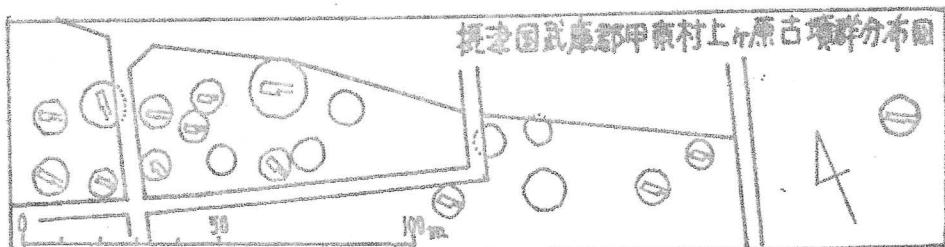
この文章にあたる現在の地点は、はじめの3基が仁川百合野町の住宅地から淨水場にかけての地点、後の14基は現在の関学古墳周辺で、現在の関学テニスコート、心理学研究館付近までの仁川百合に面した地点であろう。また、上述の内容と重複すると思われるが、

墓地東方松林中に散在せり十余の古墳は、今住宅地建設のため無残に破壊せられ、又破壊されつつあり。（昭和7年4月21日）

このように、『考古小録』からは古墳破壊の過渡期の状況が理解できる。

II

次に上ヶ原古墳群に関する資料としては、昭和9年6月発刊の『考古学』第5巻6号があげられる。この中には、小林行雄氏が上ヶ原古墳群の分布図を載せられている。
註③



これらの古墳群を想像することはさえ不可能である。

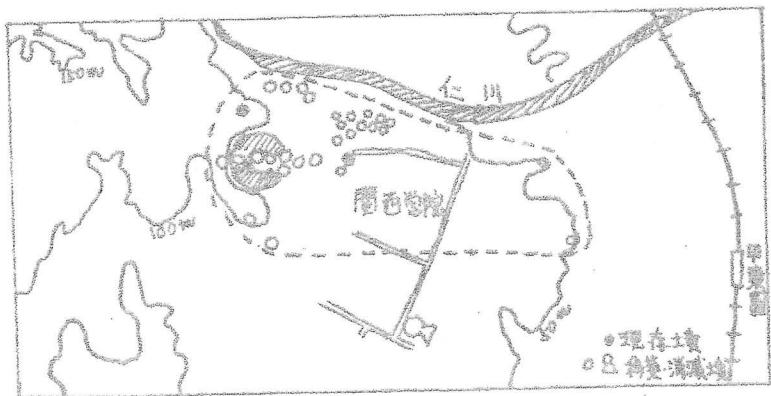
次に、昭和28年には、現在の甲陵中学校正門の西方にあ
る入組野古墳といふ小古墳が調査され^{註④}ている。この古墳も
調査のうち破壊され、現在では県立西宮高校の校庭に移築さ
れている。また、上ヶ原古墳群の最東端には百ヌ古墳とい
う古墳があり、その器物が出土したといわれているが詳細は明らか
ではない。

III

以上により、上ヶ原古墳群の範囲及びその規模を考えてみ
たい。

上ヶ原古墳群は、その西端は現在の淨水場付近で、そこか
ら東へ仁川河畔に接し、仁川百合野町、関原古墳、関原テ
ニスコート、心理学研究館にかけての密集、そして甲陵中学
付近に至るまでの東西約1200m×南北約500mの範囲
を有しているものと想われる。次にその古墳の総数を概算し
くみよう。まず、『考古小録』からは、淨水場付近の未収集
(淨水場内古墳を含む)、新田墓地東二町の3基、墓地東方
の10数基(関原古墳を含む)が考えられ、小林行雄氏製作
の分布図から20基(墓地東方の10数基との重複が考えら
れる)、その他入組野古墳、百ヌ古墳など。以上の事から上
ヶ原古墳群は、記録からみれば30数基、その他を推定すれば約数10基の古墳の群集が考えられるのである。そして仁川

まほさんで存在する五ヶ山古墳群、旭ヶ丘古墳群との関係を考慮に入れるに、この仁川まほさむ群集墳は六甲山系において、芦屋市の八十塚古墳群に匹敵する規模の大きさを有するといえよう。



上ヶ原古墳群推定分布図 1:25,000

(古墳小鏡, 墓末分布図)
(あわら市に作成)

おりに

上ヶ原古墳群を考える場合にもう一つの注目すべき点は、群集の地点より約400mはなれて車塚といふ横穴式石室を有する前方後円墳が存在したことである。しかし、この古墳も大正頃に消滅してしまって詳細は明らかでないが、後期の前方後円墳であったと思われる。このように、上ヶ原古墳群の構造を理解するには、現在まったく手だてがない。だといつまゝのままにいいたのでは古墳群が存在したことすら忘れられてしまう。そこで記録的であるにせよ、一つの群集墳の存在を認知してもらおうと思つたわけである。(島田)

- 註①武藤誠「考古学上からみた古代の西宮地方」
『西宮市史』第一巻 1959
- ②紅野芳雄「考古小録」西宮史談会編 1940
- ③小林行雄「技術から見た古墳の様式」
『考古学』第5巻第6号 1934
- ④武藤誠「西宮市上ヶ原入組野在横穴式石室古墳の
発掘」『關西考古史學』IV 1959

(2) 開學古墳出土の遺物について (昭和34年度調査分)

昭和34年に発掘調査された遺物は下記の通りであり、その当時の調査状況については西宮市史第1・7巻を参照下さい。

須恵器と1つは壺1個・埴1個があり、装身具と1つは金環5個、滑石製勾玉1個、埋木製纏玉2個、碧玉製管玉9個・水晶製切子玉6個、ガラス製小玉36個があり、その他に鐵鎌4個・馬具(革帶留金具)1個、また埋葬遺骸つまり大腿骨のほか骨片、歯も出土しています。

開學古墳出土の遺物説明

須恵器

壺——器形と1つは少く偏平で口頸部は少く外反しており、口頸部と器面外側の一部にヨコナデが施されています。また腹部から底部にかけて一部自然繪が付着しています。この壺の口径は7.6cm、器高5.4cm、色調黒灰色、焼成は良好である。(第7図)

环——口縁部は少く外反し、その端部に丸味をおびており、内面と外面の一部(口縁部も含む)にロクロナデが施され、底部は未調整である。口径は10.7cm、器高3.7cm、色調青灰白色、胎土良好、焼成は良好であり、時期と1つは森浩一代の編年

で第4型式にあたり、7世紀の初め頃と思われる。
〔第7図〕

装身具

勾玉——色調は黒皮色を呈し、材質は滑石製である。穿孔にあたり、これは2つの穿孔をあわせて1つの穴に1マトリ、穿孔部周辺に方形のくぼみを両面に施してある。長さ18mmで、厚さ5mmを測る。〔第6図〕

棗玉——大小2つのものがあり、材質は埋木製である。色調は2つとも黒色を呈し、大きい方は最大径14mm、長さ18mm、小さい方は最大径9mm、長さ14mmである。小さい方は少しひ偏平につくられていい。〔第6図〕

切子玉——材質は水晶であり、形状は六角形で穿孔はすべて一方向から施されている。〔第5図〕

小玉——材質はガラスで色調は青緑色を呈するもの18個、青色のもの10個、緑色のもの6個、黒色のもの1個、水色を呈するもの1個、計36個出土している。大きさは水色のものが径7mm、緑色のものが8mm前後である。その他の色調のものは4~5mm前後である。〔第6図〕

管玉——材質は碧玉製で、穿孔方法は双孔でほとんどが4.5~5mmで長さ13~18mmである。1つだけが径15mm、長さ35mmの大きいものがあり、これは

だけは穿孔方法が單孔によつてゐる。色調は暗緑色のものがほとんどで他に水色、青色のものが、おのおり1個ずつある。管玉の総数は9個である。
金環 材質はすべて銅庄金張と思われるが、全体的に表面の金の剥離がひどく、4がも、とも表面がよく残つており、その他では2が少く残つてゐるだけである。
 [第5図]

なお今回の遺物の報告は西宮市史に委託された遺物を中心として、鉄鏃、馬具及び未収集の遺物等は未整理のため次回に報告したいと思う。(北山勇)

遺物名	図面 番号	色調	(最大)径 単位mm	長さ 単位mm	材質	備考
勾玉		無反色	厚さ5	18	滑石製	
鑿玉	1	黒色	14	18	瑪瑙製	
	2	"	9	14	"	
切子玉	1	白色透明	18	34	水晶製	
2	"	"	16	32	"	
3	"	"	17	33	"	
4	"	"	16	27	"	
5	"	"	16	25	"	
6	"	"	15	23	"	
小玉		青緑色 緑色 褐色 黒色	4~8		ガラス製	計36個
管玉	1	暗緑色	15	35	碧玉製	
2	"	"	5	28	"	
3	"	青色	6	20	"	
4	"	水色	4.5	21	"	
5	"	暗緑色	5	17	"	
6	"	"	6	14	"	
7	"	"	4.5	13	"	
8	"	"	6	14	"	
9	"	"	5	13.5	"	

空	1	黑皮色	30.5	15	頭正金銀
	2	"	30.0	15	
	3	"	30.5	15	
	4	白金	30.0	15	
	5	白金	30.0	15	

未收其計數表

(3) 今後の課題

以上関学古墳の石室裏剥調査の報告を行ってきた。もちろん今回の調査は、今後行う予定である上ヶ原古墳群、五ヶ山古墳群、蛭ヶ丘古墳群等の後期群集墳の研究の第一段階であり、まだ未だ歩みはじめたばかりである。ここでは、今後これら河内川をはすむ3群の後期群集墳を扱う際におこづくる問題点を今後の課題として述べみたい。

1. 群集墳の形成時期について

まず上ヶ原古墳群から見てみよう。関学古墳は出土した須恵器及び石室の型式からみて6世紀後半に築造されたものと考えられる。上ヶ原古墳群中、出土遺物の明確なのはこの1基だけである。また古墳群中、東よりに位置する入組野古墳はその石室形態から築造時期が推定できる。この古墳は全長2.3m、幅0.66m、高さ0.9mとい小規模の無袖式横穴式石室を有する小円墳である。昭和28年の調査では副葬品はほとんど検出されず、出土遺物によつて、築造時期を決定することは困難であるが、その石室形態から7世紀に入ると、上ヶ原古墳群における6世紀後半から7世紀のはじめにかけて形成された古墳群と考えられる。

一方河内川対岸の五ヶ山古墳群1号墳では、7世紀はじめに3の須恵器が、又蛭ヶ丘古墳群2号墳からは6世紀の終り、

3の纏襷器が出土している。このことにより仁川対岸の2つの群集墳とも、ほぼ6世紀後半から7世紀初めにかけてが形成時期であると思われる。

以上のように仁川をはさむ3つの群集墳は、ほぼ6世紀後半から7世紀のはじめにかけて形成されたものと思われる。今後の課題としては、さらにくわしい形成過程の解明が望まれよう。

2. 被葬者について

もちろん各古墳の具体的な被葬者をあげることは不可能である。又文献により直接特定の氏族を結びつけることも困難である。しかし概要的にはあるが、一応次のようにおおまかに3つの群集墳の被葬者の階層を考えることができるのであせらうか。

前述のようにこれら3群集墳は6世紀後半から7世紀のはじめにかけて形成されたもので、この地域の古墳築造量の圧倒的に増加の時期にあたる。このような現象は他地方でももちろん、六甲南麓一帯や長尾山でも一般的に見られるものである。こう考えた場合被葬者はやはり古墳時代中期からの生産力増大により出現した有力な農民層とみなすことができる。そして彼らの居住地及び耕地としては仁川下流域を含む武庫川西岸の井積平野が考えられる。逆にいえば、この武庫川西岸に農業経営を営む農民層が彼らの墓域として仁川を

はさむ3つの群集墳を形成するともいわれるやうである。またこれらには、これら3群集墳が1つまとまりとして、又各古墳群が1つの単位としての血縁關係、又は氏族關係、又は產業經營の關係が考えられるではなかろうか。

ところでこの武庫川西岸においては秦皇の量産が認められ2つの。この秦皇の施行年代を考慮すると、これは西漢であるが群集墳との關係も考えなければならない。

3. 前時期との關係について

武庫川西岸においてこの群集墳より時期の古いものとしては、旧海岸線真北の大塚、猪南山の2古墳、そして上ヶ原台地の車塚があげられる。いずれも現在は消滅しているが、前方後円墳であると推定され2つ。そして名古墳の築造時期としては、猪南山古墳が前期に、大塚古墳がそれよりも下る時期に、車塚が後期の前半にそれと並んでと推定される。特に前者の2基の古墳は古代の重要な港である津門に立地することから、海上交通との関連が考えられるよう。車塚は上ヶ原古墳群真北に存在し、是方によつては上ヶ原古墳群中に入れることもできるが、その築造時期は群集墳が形成される以前のようである。上ヶ原古墳群とは「めとす」3群集墳を考える場合、関連づけられるものは、まずこの車塚であろう。車塚の被築者としては、上ヶ原台地より望める武庫川西岸の平野に勢力ある、といわば豪族が考えられる。そして間

もがく車塚真近に形成される群集瘤の被葬者は、この豪族の支配下の農民層とも推定することができるのではないかどううか。

以上のように今後の課題として2、3の問題点をあげると
上げざつたが、このほかまだ見のがしている点もあると
思われる。ともがく今後の課題としては、この地域における
後期群集墳築造の背景を浮きぼりにすることにあるといえよ
う。（岡野慶隆）

註①「埋蔵文化財調査記録」『西宮市史』第7巻
1959

②『西宮市史』には2号墳と記されていき

③「埋蔵文化財調査記録」『西宮市史』第7巻
1959

④『仁川姐ヶ丘古墳群調査報告』
仁川姐ヶ丘古墳群調査委員会 1972

⑤猪口久雄『条里制の研究』創元社 1968

⑥「考古学上から見た古代の西宮地方」
『西宮市史』第一巻 1959

⑦『日本書紀』 神功皇后後元年二年条「更鑿帝
吉水門而卜之」，同光明天皇三十一年八月条「奉
於武庫水門」

Ⅲ調査参加者雑感

未熟ながらも、之々未敗しながらも最後まで何とかやりとおさえたができたうれしい。今後とも関学周辺の遺跡を研究対象としてやさしいキドいものだ。 (小島周二)

考研に入ったはじめの仕事で、いかにもままにレベルや平板を使い、何とか実測することができた。何もかもが、はじめのことと自己満足に終わるが、ニ山からも積極的に調査研究に参加したい。 (島山恵至)

僕は宝塚市の調査の為、第一日目しか出ることができなかつた。その点、クラブの作業に通じて参加することができず、若干残念である。僕としては、夏休み雲雀ヶ丘の古墳の調査に、1週間ぐらいい出でたので調査方法は一応理解できていつたが、その復習に役立つ。レベルや平板の使い方は、何回も繰り返して得せねばならぬことを痛感した。(坂井秀弥)

数日間の実測調査にだ單に参加したのみで、後は何もせずにしまった。中途半端な無責任な作業に反省している。後輩の今後の意欲的活動を大いに期待します。 (高橋さとる)

4日間の実測調査のうち、参加したのは1日だけであった。
次回からは、積極的に参加しようと思う。 (淡口精)

数々の失敗を重ねながらも、ついでに考古学に興味に気が
付く。ともかく精一杯やったという感概が残っている。そして
今後もできる限り、やるのみである。 (遠藤万里子)

大学祭の騒ぎを遠くに聞きながらの今回の調査は、非常に
人びとがいたけれども、何ものからか自分にと、少くとも
も役に立つばかりでない。これからも積極的に参加していく
たいと思う。 (小野登流子)

Ⅹ あとがき

昨年11月に関学古墳の実測を行ない、今年3月に報告書を作成、完了させるべきものであります！たが、我々編集責任者の怠慢で今日まで遅延してきました。今回の調査は実測調査のみで、遺物については前回の関学古墳の調査のものを参考してみます！た。1か1研究会会員一同は、調査、執筆いずれも不慣れでいろいろ不備な点はあります。この調査報告が滋賀の群集墳研究の資料となり、また我々につづく後輩たちの礎になることを期待したいと思ひます。また今年は、当研究会が中心となつて昭和47年に行なつた雲雀山東尾根A支群の調査報告書が出て予定になつています。研究会の方針として、当面は後期群集墳研究を中心とし、将来は後期群集墳の調査研究ばかりではなく、今年報告書の出される高地性集落の五ヶ山跡生遺跡をはじめとする関学周辺の他の時代の遺跡及び関学所有の遺物について検討を加え報告していくたいと思ひます。

なおこの調査及び報告書作成にあたつては、武藤教授をはじめ先輩諸氏より、御助言、御指導をいたしまして記して感謝の意を表します。(北山勇)